

問1 後鳥羽上皇が引き起こした承久の乱が、その後の日本における政治勢力のバランスに与えた影響についての説明として、最も適切なものはどれか。（2016年 和歌山公立入試 類似）

- 幕府が朝廷の監視を強め、全国的な武家政治の優位が確立した
- 朝廷が軍力を強化し、幕府を減ぼして公家政治を復活させた
- 天皇中心の政治を理想とする建武の新政が始まり、武士が排除された
- 守護が大名へと成長し、幕府の権威が失われて戦国時代に入した

問2 源頼朝が各地の荘園や公領に「地頭」を配置した目的や、その後の歴史的背景を説明した文として、最も適切なものはどれですか。（2022年 大阪公立入試 類似）

- 幕府が直接土地を管理し、荘園領主である貴族や寺社の経済基盤を強化するため
- 武士が土地の管理や年貢の徴収を直接行うことで、幕府による地方支配の実を挙げるため
- 大陸からの侵攻に備え、全国の海岸線に防衛拠点を築いて兵糧を確保するため
- 天皇中心の政治を取り戻すため、旧来の国司に代わって軍事指揮官を派遣するため

問3 鎌倉時代、御家人の領地が一つの大きなまとまりから、長男、二男、長女、三男といった複数の子供たちへ細かく分けられて継承される状況がありました。このような相続の仕組みを何と呼びますか。（2017年 群馬県公立入試 類似）

- 分割相続
- 単独相続
- 惣領相続
- 永仁の徳政令

問4 13世紀後半、鎌倉幕府が「永仁の徳政令」を出した主な背景として、最も適切な説明はどれですか。（2020年 長野県公立入試 類似）

- 二度にわたる元軍の侵攻を防いだものの、十分な恩賞を与えず、貨幣経済の浸透により生活が困窮した御家人を救済するため。
- 全国的な飢饉による農民の反乱を防ぐため、年貢の減免を約束し、公家や寺社の所有する土地を強制的に再分配するため。
- 戦国大名の勢力が拡大する中で、幕府の権威を回復するために、有力な武士たちに忠誠を誓わせる新たな行動規範を定めるため。
- 海外との貿易を独占し、大量に流入した宋銭の流通を制限することで、物価の安定と幕府の財政再建を図るため。

問5 1221年に起こった承久の乱ののち、鎌倉幕府の支配力が西日本まで及ぶようになると、各地で地頭と荘園領主との間の紛争が急増しました。これに対し、3代執権の北条泰時が、御家人同士や地頭と領主の争いを公平に裁くための基準として1232年に制定した、武士独自の法を何といいますか。（2023年 山口公立入試 類似）

- 御成敗式目（貞永式目）
- 公事方御定書
- 十七条の憲法
- 建武式目

問6 1185年、源頼朝が朝廷から設置の許可を得て、全国の荘園や公領ごとに配置した武士の役職を何といいますか。（2015年 岡山公立入試 類似）

- 地頭
- 守護
- 勘解由使
- 評定衆

問7 13世紀後半、モンゴル帝国の一部である「元」による二度の襲来（元寇）を受けた日本と、その後の元との関係について述べた記録として、歴史的な事実に基づいた正しい内容はどれか。（2024年 宮城県公立入試 類似）

- 二度の襲来によって軍事的な緊張は高まったが、その後も民間レベルでの商人の往来は続き、貿易や文化の交流は維持された。
- 元の侵攻を退けた日本は、それ以降、中国大陸との一切の交流を断ち切り、ヨーロッパ諸国との大西洋貿易に専念した。
- 日本は元の支配下に入り、長安を都とする帝国内の一州として組み込まれたことで、日本の伝統的な武士社会は崩壊した。
- 元は日本との和平の条件としてキリスト教の布教を要求したため、これを受け入れた日本にポルトガルの宣教師が多数来日した。

問8 承久の乱の後、安芸国（現在の広島県）などの西日本諸国において、相模国（神奈川県）出身の香川氏や小早川氏、武蔵国（埼玉県・東京都）出身の熊谷氏や金子氏といった一族が地頭に任命されています。このような事実は、当時の社会の変化についてどのようなことを示していますか。（2018年 愛媛公立入試 類似）

- 幕府の基盤である東日本の武士が西日本の領地へ進出し、幕府の勢力圏が拡大した。
- 西日本の伝統的な武士団が力を強め、東日本の武士を圧倒して幕府の要職を占めた。
- 朝廷が東日本の武士を懐柔するために、西日本の肥沃な土地を自発的に譲り渡した。
- 地頭の権限が徴税業務のみに限定され、東日本の武士が西日本に移住することを禁じられた。

問9 鎌倉幕府を開いた源頼朝は、将軍として全国の武士と主従関係を結びました。このとき、将軍に対して忠誠を誓い、軍役や番役などの義務を負う代わりに、自身の領地の支配を認められた武士を何と呼びますか。（2020年 香川公立入試 類似）

- 御家人
- 侍大将
- 足軽
- 守護代

## 答え合わせ・解説

問1	<b>答え 1</b> 幕府が朝廷の監視を強め、全国的な武家政治の優位が確立した	承久の乱以前、幕府の支配力は主に東日本に限定されていたが、この乱で朝廷側に勝利したことで、幕府は上皇を隠岐へ流し、仲間の公家や武士の領地を没収して功績のあった御家人に分け与えた。これにより、西日本を含む全国に幕府の影響力が及び、武士が政治の主導権を握る体制が決定的なものとなった。建武の新政は、約100年後の後醍醐天皇による取り組みである。
問2	<b>答え 2</b> 武士が土地の管理や年貢の徴収を直接行うことで、幕府による地方支配の実を挙げるため	地頭の設置によって、幕府はそれまで貴族や寺社（荘園領主）が支配していた土地に、自身の配下である武士（御家人）を送り込むことに成功しました。地頭が年貢の徴収や警察権を握ることで、荘園領主の支配力は弱まり、武士による地方支配が強化されていくことになりました。
問3	<b>答え 1</b> 分割相続	鎌倉時代初期から中期にかけて行われたこの制度は、親の所領を複数の子に分け与えるものでした。しかし、世代を重ねるごとに一人あたりの所領が細分化されて減少していくため、御家人が困窮する大きな要因となりました。のちに、領地の分散を防ぐために一人の子が全てを継ぐ単独相続へと変化していきます。
問4	<b>答え 1</b> 二度にわたる元軍の侵攻を防いだものの、十分な恩賞を与えられず、貨幣経済の浸透により生活が困窮した御家人を救済するため。	鎌倉時代後半、元寇（モンゴル襲来）での防衛戦は恩賞となる獲得領地がなかったため、御家人は出兵費用の負担で困窮しました。さらに貨幣経済の広がりにより、領地を質に入れたり売却したりする者が増えたため、幕府は御家人の救済を目的として徳政令を発布しました。選択肢にある「武家諸法度」などは江戸時代の制度であり、背景が異なります。
問5	<b>答え 1</b> 御成敗式目（貞永式目）	承久の乱に勝利した鎌倉幕府は、西日本の朝廷側の領地に地頭を任命するなど、その支配力を全国へと広げました。しかし、地頭の勢力拡大にともない、土地の境界や年貢の納入をめぐるトラブルが多発したため、北条泰時は武士の慣習や「道理」を基準とした公平な裁判を行うためにこの法を定めました。これは武士による最初の体系的な法律です。
問6	<b>答え 1</b> 地頭	鎌倉幕府を開いた源頼朝は、平氏を滅ぼした後に朝廷と交渉し、諸国に守護を、荘園や公領ごとに地頭を置く権利を認められました。地頭は土地の管理や年貢の徴収、警察活動（公事の催促など）を担い、幕府が地方の武士を統制し、土地支配を強める重要な役割を果たしました。
問7	<b>答え 1</b> 二度の襲来によって軍事的な緊張は高まったが、その後も民間レベルでの商人の往来は続き、貿易や文化の交流は維持された。	元による二度の日本侵攻（文永の役・弘安の役）は鎌倉幕府に大きな影響を与えましたが、日元間の交流が完全に途絶えたわけではありませんでした。年表などの資料にも、二度の襲来のあとも商人の間で貿易が続けられたことが記されており、寺院の建立費用をまかなうための貿易船が派遣されるなど、中国産の陶磁器や銅銭、禅宗の文化などが日本に流入し続けました。
問8	<b>答え 1</b> 幕府の基盤である東日本の武士が西日本の領地へ進出し、幕府の勢力圏が拡大したこと。	承久の乱の恩賞として、東日本に本拠を置いていた御家人たちが、新たに獲得した西日本の土地の地頭に任命されました。これにより、幕府の支配体制は東日本中心のものから、日本全国に及ぶものへと大きく変化しました。安芸国に見られるような東日本出身の氏名の広がりは、この政治的な影響力の拡大を裏付ける重要な証拠となっています。
問9	<b>答え 1</b> 御家人	鎌倉幕府の組織を支えたのは、将軍と個人的な主従関係を結んだ武士たちです。彼らは御家人と呼ばれ、将軍に対して忠誠を誓い、有事の際の軍役や平和時の警護（番役）などの義務を負うことで、自身の所領の支配権を保障されました。このような土地を仲立ちとした主従関係を封建制度と呼びます。